

俳句

青木敏行

(サンシャイン)

地球裏の戦火の匂ふ蟬の穴
揺すぶつて木の実を落とす猿の親
横浜やスープカレーの姫キャベツ
風光る投手の少女髪束ね
出目金のひらり耀ふ黒曜石

青柳白芳

(魔)

江の電や軒先抜けて春の海
いつからか空家となりしリラの家
秋涼し猫とピアノと暮す家
水鳥の煌めく水脈やちぎれ雲
歳旦や鳥居に見えし白き富士

青柳佑美

(xix)

蓮の実やひとりを選びひとりをり
実ざくろや靴音ひそむ素描展
薄くなる父のそびらや洗ひ飯
フェラーリの初心者マーク夏の海
籐寝椅子ラフマニノフに沈み入り

阿部和代

年賀状変らぬ文字の友想う
冬晴れて同窓会は宇佐参り
紫陽花や坂の途中の能楽堂
三尺寝空調服のモーター音
短夜やオーディオブックの菊之助

阿部政子

有井悠木

彼岸詣木洩れ日掬ふ柄杓かな
無くしものポケットにある更衣
尺蠖の尺のチクタク立ち話
送り主代替りして新米来
寄せ植ゑの施肥のふかふか冬ぬくし

あや子

生田暁美

観測船「しらせ」戻るや秋の海
海浜の紅きコキアや秋深し
墓に沿い守るがごとく曼珠沙華
歌仲間百歳前に逝く秋さびし
ずっしりと郷の新米届く朝

(みちくさ)

(鷹)

山桜快気祝ひの膳寧き
冷房車国の解らぬ言葉きく
もぢずりや遊具にあがる子等の声
電柵に等間隔のとんぼかな
青鳶や父の時計のよみがへる

一柳 はるみ

稲垣正晴

身ほとりに彩をふやして三月来
せせらぎの音を集めて猫柳
樹の窪にたまる甘露や鳥の恋
なべてみな老いてよき貌春の風
髪切つて風切つてゆく立夏かな

(k.s.)

(k.s.)

嘘じみて本音告げけり四月馬鹿
落ちながら風捉へたり巢立鳥
ウェブ会議画像をオフに目借時
鯛や悲し悲しと聞こえけり
蟬の羽振り回したる蟻の顎

伊藤 しおり

今井 美恵子

よく眠る猫に初夢尋ねけり
子がちぎるつゝじの蜜や指に春
蠅取紙まぬけにゆれてゐるばかり
墓洗ふ爪に残れる苔青し
冬田道舌にてなぞる糸切齒

(k.s.)

(渡)

忘るるといふも癒しか初昔
清方の女人に逢へり春しぐれ
三叉路やわれを見捨てし道おしへ
影取とふ地名は寂し暮の秋
小寒や町から消えし夜鳴蕎麦

居山 勝

岩谷 明子

(天為湘南)

新学期蹴る音止まぬ逆上がり
釜茹の地獄絵見入る炎暑かな
赤とんぼ群れて青空押上ぐる
炎炎と小径形どる曼珠沙華
片時雨石碑一つの渡し跡

(冬すみれ)

春一番砂蹴散らせば砂光る
風光る未踏の八十路ゆつくりと
ボサノバのテンポに吹かれ夏の蝶
玉虫の死しても輝き放ちおり
凜として秋天を突く大樹かな

岩田 かつ子

上沢 洋子

(まら)

朝採りの野菜を貰ふ麦わら帽
秋立てりポストに文の来たる音
枝豆や無口と下戸の二人酒
ふるさは豊の秋らし宅急便
新米を掬へば両手仄温し

(まら)

短夜やジグゾーパズル1000ピース
釘打てり終の棲家や夏帽子
ひやむぎにこだはりのある人と居て
書店より届く新書や秋立てり
新しき靴を買ふなり涼新た

植田 稔

上野 美恵子

(湘南アカデミア)

花火の音風乗り継で我が家まで
秋の庭虫音混りて虫籠なり
金木犀ひっそり広がる坐禅堂
アコレーション避けて匙差す水水
目に染みる茄子の糠づけ朝餉皿

長き夜や風頬をなで樹々の中
小鳥飛び風の音聞く高き空
黒葡萄ひかり集めて輝きぬ
ひと粒のどんぐり拾うみちすがら
星一つ大きく流れ谷の中

植田 裕子

上松 マリ

(まら)

極月や朝の尾根道吾ひとり
太平洋へ自転車の列初日の出
草の間にとびとび光る春の雪
昼寝より醒めて泣く児や花曇
青胡桃児の帰り待つプラレール

(天為湘南)

拍手連れ風切る走者三が日
強東風や原爆ドームが凜と立つ
雨あがり辛夷が空へつんと向く
術後の夫うす目の笑顔梅雨明くる
水突つくおんぶ蜻蛉は太古から

占部 美土子

オウミ タカリン

(はまべ)

蜻蛉やランドセルの子走り出す
夕日背に空の広さを渡る鳥
千代紙の花びら散らし障子貼る
金秋や加賀友禅の筆さばき
現し世の涙の色か曼珠沙華

紡ぎ折エメラルド婚実万両
行つて来ます健気な孫や風光る
妻入院憶念の心炎暑かな
朝食の後の一睡夏に克つ
熟帰り孫のただいま月涼し

江口 文子

大木 保幸

(天為湘南)

冬日差す図書館で読む旅の本
神妙にどの子もしかと屠蘇祝ふ
コーヒー店ふはりやさしく雛飾る
静けさや空をうめたる藤の花
老いてなほ推しの情熱夏芝居

(かるがも)

巳の年や六巡の身にお元日
年年にさくら相似て生きにけり
露の葉をそつとめぐりて茎ほそし
新涼やドローンたちの光る星
また今年マツバボタンの色あふる

大久保 啓子

大山 賢太

(たけのこ)

夏帽子少しななめに街に出る
木の芽風やりたいことでも探さうか
春雷の身構へる間に終りけり
秋思ふと夫なき日々の過ぎしこと
降り止まぬ落ち葉の中にただ立ちて

(みちくさ・かわせみ・かるがも)

百日紅空向き咲けり薄紅に
サクサクと甘く真つ赤な西瓜かな
鳳仙花庭の片隅赤く咲き
秋桜赤白黄色咲きにけり
秋の峰すべて落とすや去る憂い

大平 雅芳

大山 美和子

(から)

新幹線石火のごとし四月逝く
感嘆子湧くごとと蝌蚪の生れにけり
二部合唱新樹の風を膨らます
帰省子に島のゆふぐれ長きかな
裸木の高々とあり農学部

(から)

嬰兒のそのまを抱く春セーター
黒髪の三つ編み揃ふ聖五月
ひとり言多くなる日や更衣
足指の掴む大地や夏休み
人肌の煎茶二杯目今朝の秋

岡本 泉

(鷹)
ギブス巻く足持て余す夜長かな
汀女忌や色佳き柿の一葉手に
ヨコハマと聞けば船旅いわし雲
幼児にはじめての匙寒明くる
風光る髪染の色明るめに

沖石 讚岐

(空)
瓜漬のそれぞれにある隠し味
まつさきに母が噎せたり麦こがし
泉殿に平安の世の水湧きぬ
陶枕や夢に関羽の怒り貌
卓袱台を廊下に出して蚊帳を吊る

小田 徹夫

(空)
読みかけし本平積に春炬燵
シヨベルカー砂掘る浜に夏来る
留守電の流るるままに昼寝かな
父の日や看取り介護と言ふうつつ
一徹を守り今日あり冷奴

男波 弘志

(空)
鯖缶の中の鯖の身花曇り
喉と喉花の冷たさまで歩く
また父を死なせる忌日春障子
あとがきに全く碧い蛇がある
八月の水に手を置くいつまで置く

加藤 静子

(ほこべ)
水茄子やさくつと裂いて辛子つけ
ほめて飲む新そら豆の茹で加減
谷中生姜まづ一本は味噌つけて
夏料理グラスきりりと冷やしをく
母のひと世いく度茹でしほうれん草

金井 詩子

(波)
幾山河ふるさと後に春の雪
見張台残して浜の夏果つる
一口のワインに足りて春の宵
星一つ残して隅田の遠火花
最上階住みてちちろの初音かな

加藤 七海子

(空)
門口で豌豆貰ふけふは晴れ
白南風や父が吾子抱き宮参り
子どもらの声消ゆる午後油照り
片陰を地図を片手の同期会
声上げてねずみ花火と走りたる

金子 真悠美

(天為湘雨)
黒塀の路地の静けさ雪柳
ふわり揺れとろり香るや藤の花
青楓乳飲み子の瞳の清かなり
シニヨンの首筋に風夏柳
吾亦紅自由気ままなひとり旅

金田美保

亀倉美知子

(かるがも)

ふきのとう友より届き天ぶらに
花万朶調律のあとセレナーデ
昨夜の雨手袋はめて草をとる
金色のイチヨウの葉っぱや風にまう
父母思う遠くていけぬ墓まいり

一人ゆく聖ヶ谷（せいじりやと）の百千鳥
早蕨や産着にのぞく固こぶし
さくら咲く校門は今朝日本晴れ
民草の二十万の名沖繩忌
ふるさとの井戸辺のたらひ夕焼空

神谷章夫

河村笑

(くら)

妹の音に踏まるる薄氷
往來の人を数へる春炬燵
いつ終はる鉄道唱歌山笑ふ
詩人あつまる藤沢の目借時
あめんぼの水輪のあたる亀の首

(鷹)

落第横丁抜けて菊坂冬ぬくし
梯子乗倒立に空張りつめる
雑踏に紛れず夫の冬帽子
薬苞を湿らす雨や寒牡丹
もてなしは庭でバエリア春隣

河村青灯

窪田寛

(鷹)

春きざす島の隘路の配達員
人知れず弁慶塚に花過ぎぬ
朝霧の消ゆる端より水芭蕉
名月や告げにゆきたし見てゐたし
冬帽を上げ夕富士の暗むまで

(くら)

鶺鴒沼や花のあふるる裏通り
通るたび心の糧に桜みち
年取りて八十八夜もただの夜
夏至過ぎて色の溢るる街の中
曇り空紫陽花の紺目を奪ふ

草柳節子

熊倉弘幸

(天為湘南)

春一番日陰の草の円舞曲
いつのまに蕙の色づく坂の家
味噌汁の今朝は大根の香り満つ
芍薬や手品のカードわき出づる
くらやみにいく度寝返へる薄暑かな

(くら)

雨垂れの音を聞きつつ鯖焼く
田舎道草の香渡る走り梅雨
麦藁帽押さへて渡る青信号
由比ガ浜の辻の一息かき氷
津波警報駅の混乱油照

熊倉美紀

街路樹の根元半畳土筆生ふ
長餅の日永の地より運ばるる
いにしへの強さ織り込む藤布かな
緑蔭を選ぶ買ひ物の老女かな
植木鉢三軒先に野分晴

黒田美佐子

春蟬の大音量に目覚めをり
この一歩からと伊能の初夏の庭
亡き友のなほ偲ばるる遠花火
蚊遣香朝一番の庭仕事
七夕や多羅葉の葉に思ひ込め

小出玲子

合歡の花碧眼の僧バス待てり
変体仮名揺れて紺地の暖簾かな
地下鉄の出口間違へ大西日
立秋やカレーの味を少し変へ
川に手を合はす人ゐて終戦日

光宗すみれ

花冷えや着信音は薄紅色
薔薇咲くやレンガ塀より愛の詩
頬よせて母まばたきし合歡の花
揚羽蝶ひらりあらはれ宇宙に去る
布に風灯籠みちは夏の夕

小高秀則

神棚の軍手勤労感謝の日
調弦の弛むウクレレ梅雨曇
イルカシヨ―水平線に雲の峰
文庫本携ふ土手の花吹雪
博物館裏に陣取る花見哉

小林美知子

蹲に山茶花散りて水動く
群青の空いつばいに辛夷咲く
枝枝の木の芽開きて空近し
南風吹き湖面の富士を散らしけり
問ふように鹿とどまりて見つめをり

小堀公美子

初芝居はねて銀座の灯かな
手付かずの遺品に暮色花海棠
蜜豆やとつぶり暮るる木挽町
秋彼岸木魚の醸すフォービート
大芭蕉実りたわわに枯れゆくか

小松原キイ子

故郷の姿はらぬ匂ひ星月夜
子鼠の跳びだす絵本秋ともし
氏神の子供太鼓や初御空
寒戻る入浴剤のシユワシユワと
百合つばみ紅を透かせる枕花

小山 晴湖

齋藤 まり江

(x5)

せせらぎの魚影くつきり草萌ゆる
急ぎゆく翁リユツクに桃の花
コラージュの軽き指先春きざす
摘草や母は童にもどりけり
参道わき和尚ひとり茶摘かな

(波)

蒼穹を背負う社殿や初詣
高麗山は母の思い出春霞
十三夜心の中まで透きとおる
せせらぎやきらきらと紅葉散る
冬落暉坂の向こうの染まりゆく

小山 美保

佐々木 順子

(みちくさ・かるがも)

風鈴の鳴る音耳元心地良く
薄暑来て早もや半袖若人ら
さくらんぼ添えて美しサンドイッチ
苺食べ練乳の中泳ぎけり
墓参り久方ぶりか線香そえ

(湘南アカデミア)

空蟬は羽化を観た子の宝なり
青鷺の啼く大樹より夕迫る
三線の暗夜にひびく沖繩忌
色鳥や廃墟にのこる百葉箱
かなかなかな祈りの空にひびく声

佐藤 美津子

佐野 健

(天為湘南)

二人居のゆるりゆるりやあやめ咲く
一坪の畑賑はふ夏野菜
鳩時計秋の光にはばの音
冬雲や眼鏡にルーペ重ねをり
読みかけの本を仮置き年の暮

(x5)

園児らの顔が並びぬ花御堂
初つばめ雨脚を切る翼みせ
鶯の高音はしばし空にあり
義経を名に負ふ白き藤咲けり
水割りの氷ぐらしと夏きざす

佐藤 よつば

佐野 典比古

(x5)

麦秋の故郷の味も忘れけり
那智の旅滝に疲れを落としけり
急登や陽に近づけど風涼し
東西の鰻の味にこだはらず
帰宅後に父と並んで月見豆

(x5)

春灯や文机にある己が影
うららかや土塀に曲がる松の影
消しゴムの先端で消す臙月
セロファンに月包みをり春惜しむ
触れ合うて音の鳴り出す小判草

塩崎 琴

(まろ)

初恋のペールを脱いで黄水仙
奥谷戸の芹幼きを摘みにけり
新涼の水を供へて山の神
蔵の隅に残るラヂオや終戦日
中庭に池ある母校ひつじ草

篠崎 路子

身内とふ言の葉ゆかし秋桜
指折りし秋の七草五つほど
文化の日日ボ語と達者とふ孫二人
秋うらら孫摺り体験浮世絵館
一遍忌さわやかな人と一会かな

篠田 清秋

(かわせみ)

初日の出江の鳥見つつごみ拾い
夏の夕「恋は水色」子と聴きに
海の日や市長と浜のごみ拾い
天高し浅間山見て露天風呂
障害者とスポーツの秋ボッチャ戦

篠原 広子

(まろ)

つつつと指触れて行く猫柳
繰り返す朝のエチュードすみれ咲く
やあと来てじやあと手を振る立夏かな
桑の実のほろほろ幹の大曲り
パセリ刻む母の鼻歌めづらしき

柴田 美智子

(まろ)

手作りの風に抗ふ夏帽子
夏帽子後ろ姿の若く見ゆ
蝉の穴数多あれども蝉鳴かず
無人駅何かしつくり花カンナ
一山の一切あつめ滴れる

柴山 洋

(まろ)

漁師町はや寝静まる五月闇
蠅叩き持てばそこらに蠅居らず
麦藁帽斜塔のごとく積まれをり
墨堤の風に冷ますや泥鰌鍋
喪の家の静かな縁を蟻歩く

島田 昌子

(一葉)

我が名前忘れし人へカーネーション
極楽極楽母の口ぐせ水蜜桃
石籬咲くや母の一生語られず
絶筆の梅一輪の日記かな
夕顔や「寅さん愛」の叔父逝きて

清水 誠

(むかひ)

初参り駅伝駆ける古刹かな
孫追いて土筆摘みし日幾星霜
おきゅうとに再会の宿夏の旅
満月に映る地球の暗い影
寒空にカシミヤまといし夜の銀座

庄司 すみこ

森 童

(天為湘南)

(みくら)

水やりのホースから湧く虹の橋
草抜いて色白茗荷顔を出す
熟し柿鳥そつばむき道端に
梅花藻に泳ぎ初の目高あり
あちこちの地震をさまれ秋向ふ

残雪の富士借景に巨船泊つ
大小の仲好く籠へトマト挽ぐ
ハローキティ掴まり立ちや初紅葉
薪爆ぜて子らのまねぶや里神楽
初能や凜と発する仕手の声

四 郎

鈴木 絹子

(天為湘南)

(冬すみれ)

アロハにも似合ふ年頃似合ふ場所
ゴンドラの眼下は秋のグラデーション
駅伝やそうそうそうと伴走車
コンクラーベ白い煙やマリア月
秋空や大屋根リング一周す

まくなぎを抜けて石段駆け上がる
ホスピスにコーヒータイム秋涼し
古書街の溝の匂いや震災忌
穂芒や風のスキップ野の光
手から手へ渡る林檎やバスの中

鈴木 千枝子

鈴木 晴菜

(天為湘南)

(みくら)

修験者の影を呑込む霧襖
鮎落ちて山河静かに暮にけり
難解な古地図の文字や紙魚走る
海風や頬へ弾けるソーダ水
地球裂く神の御手なる大瀑布

右足のペダルを探す蝶の屋
二寸ほど跳ねて飛びたり雀の子
蠅生れ窓辺の木目なぞりたり
翡翠の波紋しづかに広ごれり
それぞれに向かふ空あり吾亦紅

鈴木 千砂

ステパノ

(みくら)

(みちくさ)

待春の石の天使は頼杖を
クロッカス手品のやうに咲いて消ゆ
幼名で今も呼ばれて桜餅
トンボロの薫風跨ぎ江ノ島へ
噴水に七色の風吹き抜けり

少しずつ雲の崩れし酷暑かな
頼もしき最期のちから兜虫
おほちちの杖まつすぐや復活祭
マフラーのほつれや恋はままならず
数学の記号の粒だち夏の空

須藤 亮

(五五)

凍蝶の命は風に教へられ
戦争は終はらぬままにレノンの忌
青春は人に話さず寒昂
春炬燵黙りこくりてゐて二人
春服を縫はむと妻の裁ち鋏

須藤 かぐや

(五五)

穀雨なる野口英世の功績に
春雨に数羽の野鳥観察所
青葉分けケープルカーは青葉号
べた風の大東埼に夏霞
秋浅しほけの封じを祈願する

草 心

金風や早三十二年母の死後
病む友の吾は傾聴と身に入むや
早梅雨リユツクの歩く幼き子
ジャズ流れ部屋の一枝沈丁花
母の日のメール財産保存版

高瀬 俊次

(五五)

山茱萸の一花一花の小宇宙
亀鳴くや君は知らぬか種の起源
吾が春愁水割り二杯ほどのもの
両毛線の掻き分けて行く麦の秋
国境の鳥影深し青葉潮

高野 一郎

(天為湘南)

運動会探し回るヤカメラの目
敬老日漢字まじりの手紙手に
秋高し店の切り盛り老夫婦
目で合図降る駅へと秋惜しむ
渋柿の梯子で吊す親子の手

高野 尚志

(五五)

鶏鳴に鶏鳴応ふ四温かな
日脚伸ぶこゑ賑やかに小鳥小屋
蝌蚪の国覗きて己が顔さらす
初桜海みてこころ定まらず
外洋に船の量感夏來たる

高橋 みつ子

(五五)

短夜や波音せまる旅枕
御殿場線ぐんぐん迫る五月富士
友を待つ開演ロビー西日射す
新米を供へて辻の風の神
後の月書店に流るドビュッシー

田中 孝衛

(五五)

春眠や思ひは遠くジャンダラム
風薫る母校に続く急な坂
赤き薔薇一本置いて君を待つ
少年の竿の動かす雲の峰
月光の雲海に浮く前穂高

「公 子」

手塚 智之

(藤沢翔陵高等学校)

(みちくさ)

紅の木の葉流れる水無川
夕闇にとけた螢は花のよう
浴衣着た君のひとみにうつる僕
まだ君は覚えているかなあの花火
アゲハ蝶君と見ていたこの場所

数が減り添え書き増える賀状かな
妻と行くはるか向こうの凌霄花
咲きだした三つ四つ七つ酔芙蓉
青空に赤白ピンク百日紅
梨貫うしやしやしきのあの男

次田 磯美

常 盤 貴美子

(まら)

(冬すみれ)

杜へと遠回りする青田かな
短夜や鐘に目覚める座禅堂
汐風の運び来る音遠花火
瀬の音も馳走となりし夏料理
秋立てり新刊本を探す書架

白みたる空豆腐屋の寒の水
新緑の濃淡に景ふくらめる
旅装解き火色囲みぬ夏炉の夜
秋澄むや一湖に映る逆さ富士
束の間の小春の日差句碑を抱く

鳥海 陽子

中岡 裕志

(なな)

さらさらと笹の音きき夏料理
花菖蒲うれしき知らせ届きけり
短夜の夢の続きがとぎれけり
簾ごし木々の緑のそよぎかな
遠浅の海や泳げば浜遠く

秋来る朝日射し込む東部屋
空をへり笛と太鼓の村祭
遺言を残して余る秋の雲
名月やゲートボールの打球音
老年や言葉忘れる秋の雨

内藤 繁

永塚 享司

(天為湘南)

うろこ雲でこぼこ響く救急車
秋冷や身ぐるみ剥れ施術台
声やさし眼は尖りをり鶏頭花
七色の配線胸につばめ去る
午後三時見舞に来る赤とんぼ

新緑やターザンロープに子らの列
雨を待つ小さき蕾の四葩かな
珈琲や今日はホットに走り梅雨
鉢巻もきりと神輿担ぐ子ら
線香花火や玉のポトリと落ちて聞

中根 美保

(一葉)

ゆつたりと座して百寿の初笑
鷹匠の身をしならせて鷹放つ
ひっそりと鯉の太れる花の昼
別の世の闇すぐそこに螢狩
足跡の先に子らゐて秋の浜

中村 初江

(五五)

ゆく年や夕日に光る風の海
梅白し母の忌日の陽の淡く
躓きし野路に地獄の釜の蓋
方丈に碧眼の僧沙羅の花
あさがほやきのふは五つけふ六つ

中村 みき子

(五五)

春の月帰る子の角曲がるまで
バケツにも煌めき生まれ薄氷
屋形船花の下枝に触るるほど
枯れ枝と見ゆる中にも木の芽かな
切手三枚組み合はせ貼る暮春かな

成岡 明子

(五五)

風立ちてまた蘇る鯉のほり
噴水の空に触れたる一呼吸
膝寄せて練香花火の輪が出来る
畳まれてゐても涼しき白日傘
子を叱る元気が今日も草を引く

鳴坂 理智子

(天為湘南)

春雷や会議の後の缶コーヒー
熱帯夜水槽の主就眠中
古民家やオーブンメニュー走り蕎麦
十五夜のうさぎが招く宇宙船
絵本からトナカイ空へ聖夜かな

林 哲夫

(五五)

白木蓮のつぼみの固し東北忌
新人生並び走るやゴールまで
隣より貰ひし胡瓜棘多し
匂ひ立つ梅の実届く夕べかな
蝉鳴くやプラスチックバンドの昼休み

野原 青

(五五)

きふ生きる力もらひぬひなたほこ
無菌室いのちありけりクリスマス
冬夕焼酎むがごとし大櫛
いのちかけしるべなきそら鳥帰る
白藤や遺影の笑顔輝ける

早田 登

しょうぶだつ剣に見立て挑まれる
薫風にまじる街角焙煎香
いけめんの甚平がさそう人力車
夏草や雑という豊かな世界
老いてなお目元涼しき羽抜鳥

原 みづき

(冬)

起き抜けの足腰固し今朝の冬
久々に針箱出せば一葉忌
冬晴や開封急ぐ子の便り
ポインセチア窓辺に朝のパンを焼く
数へ日や子供と遊ぶ役となり

原 田 稔

(冬すみれ)

薄一枝手折りて挿せば山の香も
クレマチス今年選びし濃紫
皐月富士どこから見ても日本一
春コート脇に抱へて孫来たる
静かな夜突如破りて猫の恋

廣 崎 龍 哉

空覆う河津桜やのびのびと
天高し富士と阿夫利の揃い踏み
三猿に人生重ね秋思かな
漆黒の胎内巡り冬隣り
湯元かな行き交う客の息白し

門松や訪ひ来る人は皆笑顔
新聞を斜め読みして啄木忌
挨拶をするためにとりサングラス
少少の風には揺れず大糸瓜
柚子の香を愛でつつ浸る冬至風呂

深 瀬 涉

藤 田 真知子

(冬)

手袋を外して掴む小銭かな
鳥帰ル全員無事ニ帰還セヨ
おばちゃんの春マフラーも豹の柄
土産屋の葦簀越しからはやり歌
窓の外風と光と合歡の花

(冬)

荷造りを終へし吾子の背風光る
逃げ水の果てや阿修羅の救ひの手
万緑や一樹となりて吾も立つ
梅雨きざす蔵の漆器の息遣ひ
三尺寝ボレロのリズム続きをり

福 田 善 吉

船 旅 遥

(冬すみれ)

白梅のほのかに明るき夜道かな
古里へ続く鉄路や風五月
老鷲に背中押されて坂登る
風紋へ寄せ来る波や秋澄めり
何もかも忘れて一人日向ほこ

句に迷ふ風の返事に虫の声
霧の午後ギターの余韻古都へ君
野分過ぎ風に洗はれ苔の艶
色浅く小さき秋の足早に
秋高し母と選びし道の色

菩提利視

(まろ)

浦波の間に間に白き山眠る
栄螺の香屋台の空にのほりけり
春北斗ネットサーフィン佳境なり
人もなくただ月照らす花吹雪
揚げる帆に風満ちてゆく青葉潮

堀口 みゆき

(鷹)

捨案山子殿られしごと草に伏す
鶴沼の家並しづかな聖樹の灯
透彫ランプ鶯色憂国忌
樹々抜けて風鈴の音みどり色
朝涼や浜辺の歌に電車発つ

馬來 まち子

(サンシャイン)

庚申塔の判読不明蛇莓
トンボロを渉る子白のスニーカー
赤べこの首振る日ぐれ風涼し
夏衣鎌倉八幡段葛
物を捨て思ひ出捨ふ暮の秋

増井 智子

(二葉)

白梅やこぼるるやうに目白翔ぶ
春深し耳の大きなオカピの仔
枝の先まだ濡れてゐるてんと虫
防草シート破れ広がる残暑かな
水仙の香りの束を活けにけり

松坂 真理子

(まろ)

盛り塩の引戸を開けて新年会
手伸ばしで干したる産着木の芽風
春愁や両手で包むティーカップ
花冷えの首に重たき喪の真珠
散りながら風に膨らむ桜かな

見上 都

(鷹)

あかねさす日を纏ひそむ皁月富士
来賓の椅子並べをり施餓鬼寺
台風の不気味な精気雲あつし
願ひ事五円にすます西日かな
技官の水音暗み苔の花

三品 敦子

(天為湘雨)

春うらら笑ふ埴輪にうふふふふ
菜の花や故郷を出でて半世紀
旅果ての衛星飛びて星流る
解体の家眺む眼やはだれ雪
松虫やソロを楽しむコンサート

水沼 富子

(まろ)

鯨鯨の吊るされてゐる通学路
帯締めて一人の刻を小正月
雪解川日本海へと雪崩れ込む
若き日を真面目に生きて昭和の日
母の日や父親役を務めし手

美濃羽 晴衣

(255)

夕暮に母を想ひて桜餅
膝小僧はつきり見える子どもの日
小さな手団子丸めて新茶飲む
子と朝に電車見送る夏帽子
台所今宵は譲り合歡の花

宮川 敏江

(波)

つきあひはつかず離れず浮寝鳥
焼き立てのバゲット枯葉踏む通り
白木蓮白紙に戻す胸の内
鐘霞むバレイドリアののんき顔
耐ふる目の記念写真や敗戦忌

宮 永 武 彦

(サンシャイン)

八幡様の大きな空や初蛙
着膨れて駅のベンチに見ゆる海
ゆらゆらと水を踊らす金魚かな
水音の豊かと思ふ秋彼岸
夕空の色を重ねし落葉かな

村 木 勢 子

(かるがも)

ママチャリの勢春一番が出遅れて
鳴き代る朝の囀補聴器に
湿気煎餅捨てる未練の走り梅雨
踏切渡る母子白シャツ光らせて
この辺が実家の跡地石落の咲く

村 松 麻由美

(湘南アカデミア)

卒業や渡り廊下に土埃
山若葉背中にはずむリユックかな
人通り無き白昼や百日紅
虫時雨空調の音止みにけり
着ぶくれて父が手を振る車窓かな

森 田 順 子

(一葉)

書初や日本の誇和紙と墨
診療を待つ間思はぬ花見かな
リメイクや父青春の白緋
初咲は紅蓮からや源氏池
針に糸冬日あやして通しけり

森 三保子

(255)

橋梁に絡む青鳧魚の影
駆け込む子海開きなり相模浜
林中や蟬追ふ子らの響く声
光降る木立の蔭は蟬時雨
稲の花能登の棚田に雨打てり

森 本 明 美

落ちてなほ蕊かがやきて藪椿
ふらここに抱きて乗りし孫嫁むすめぎをり
焼柴螺荒海の潮こぼしけり
紅萩のしなり小さき咲き初むる
七五三つき出す口に紅をつけ

柳生 恵子

(天為湘南)

能面の白さ浮き出る余寒かな
はらはらと浄土に続け花筏
靈山に神の声して瀑布落つ
秋茄子を白磁の皿に佳き日かな
ほくほくと頬張る故郷零余子飯

矢口 美都子

(xv)

一病を得て知る齡寒卵
通し土間濡れ跡残る雪女郎
風光る港を走るエキストラ
紫雲田や島に一つの信号機
京に買ふにほひ袋や花の雨

柳 草多

(xv)

碁石置く音の行方や雲の峰
伊那谷の青田の上を風走る
父の日や二日を過ぎて気づきをり
風鈴に目覚めし午後の暗き部屋
秋立つや「変身」読みて外は風

山下 巖

(波)

「お帰り」が消えて五年目草霞む
そこここに妻の気配や涅槃西風
正座して妻のアルバム繰る夜長
かなぶんぶん遺影の妻に体当たり
たはむれに妻の浴衣を着て眠る

山下 遊児

(波)

逆立でセーフのかたち梯子乗
左よし右よし春へ発車よし
ひまわりを立たせて留守の駐在所
穂芒を滑って遊ぶ光の子
アナログで生きる安けさ雪ばんば

山田 貴世

(波・むかご会)

燻蒸の移築古民家春一日
谷戸奥の沼面確かに亀鳴けり
大寺の屋根の曲線夏日差し
葉櫻の影さわさわといろは坂
若葉光鳩のたむろす寺の庭

山本 協子

(xv)

どの問ひも返事はふふ日向ほこ
少しだけ名前負けして冬の薔薇
豆まきの豆踏み潰す夜更けかな
渾身のゆるめのサーブ山笑ふ
保育士の二の腕太し風光る

吉田 半夏生

(サンシャイン)

子規の成す俳句四万六千日
背泳ぎやにんげん脱いで仕舞うまで
星祭よこの糸待つたての糸
踊の輪重なり増して退けず
焼譜の包む新聞泥戦車

わたしの
私 × 私 × 私

渡部 喬

(藤沢翔陵高校)

(K.S.)

梅雨明けに雲を繋ぎて神来たる
夕立の終わりを待ちて窓を見る
傘要らず夕立去りて気付きける
霧中にてあなたに夢中忘れない
霧の中少しも見えぬ銀翼よ

掘割の水ゆるやかに春流す
炬話の仕舞は風の音ばかり
大空を見あぐるやうに目高浮く
駅ホームのさよならの手話走り梅雨
昼顔の花に幸せかと聞かれ

渡辺 正剛

渡部 有紀子

(天為湘雨)

土筆摘むこの丘までの大津波
惚け道いつか来るかも木瓜の花
わしわしと蟬の氣迫を貰ひけり
百までも夢ではないよまんじゆしやげ
茶の花やこつそり恋もしたくなる

猿曳の猿の始めの二歩三歩
吹かれては色を零せり春シヨール
発着のベルのしづかに梅雨に入る
齒の抜けし痕を見せあふ休暇明
冬の波打ちあひ岸を駆けのぼる

第一三二回市民俳句春の大会

○俳句協会会長賞

入寮の荷は春雪に濡れて着く

鹿野島 孝二

○協会賞(以下同)

神谷 章夫

倒木は栗鼠の遊び場龍太の忌

松井 恭子

踏青や座にほどよき石ふたつ

大平 雅芳

感嘆詞湧くごとと蝌蚪の生れにけり

水沼 富子

青墨のにじむ絵手紙春灯

佐藤 享子

雑音を拾ふ補聴器鳥雲に

河村 笑

あたたかや子規に艶句のありしこと

富山 ゆたか

貫乳の育つ萩焼春の雨

徳江 祐子

校長の一拍遅き卒業歌

入賞作品

○特別賞

揚雲雀あしたが見ゆる高さまで

山下 遊児

○市長賞

花冷えの首に重たき喪の真珠

松坂 真理子

○市議会議長賞

青空へ向けて産卵しやぼん玉

原田 博之

○教育委員会賞

初櫻嬰の十指に十の爪

川路 ゆさ

ふうはりと慈光のごとし臙月 野原 青

吉川 美知子

啄みの形のままに辛夷咲く

福田 善吉

エレベーター春の光も乗せて来る

小山 晴湖

バレリーナ音なき着地春ともし

山田 貴世

囀りの一樹ふくらむ一の宮

畑 昌子

母在すこと春暁の火のほひ

沢田 敦子

白木蓮の百の蕾に雨けぶる

中村 みき子

探梅や急に開けて屋敷神

村松 麻由美

ひとひらの花ひらひらとてのひらに

指そつと入れチューリップ微熱あり 笠川 泉

矢口 美都子

風光る港を走るエキストラ

常磐 貴美子

花万朶心満つ日の過ぎ易し

武 正義

農機具のタンクの埃払ふ春

第五十回一遍上人忌俳句大会

令和七年九月二十三日、時宗総本山・藤沢山
清浄光寺(遊行寺)大書院にて開催。

参加者八十名、事前応募句による参加は一四二名。

講演 名取里美氏 (「あかり」主宰)

— 黒田杏子の俳句巡礼 —

○功労賞 西野洋司氏・河村研治氏・野木桃花氏

応募句の部 入賞作品

○遊行寺賞 加野 庸子

握る手のふとゆるみたる昼寝の子

○青木賞 中根 美保

流れ藻を連れ去る波や一遍忌

○北澤賞 尾崎 竹詩

梅干して干して小さくなった母

○市長賞

沓脱ぎに靴のずらりと良夜かな 杉林 明子

○協会長賞

水澄みてあらはに杭の舳ひ傷 高山 檀

○協会賞(以下同)

父の背と並ぶ子の背や鯨日和 山下 遊児

掛稲の失つてゆく草の色 湯浅 誠幸

一遍忌看取らるるものみな跣 彼方 ひらく

草の絮一遍像へ漂ひ来 今井 美恵子

白耕父は遺書など残さざり 鈴木 千砂

絡みつ、蔓高みへと一遍忌 智久 薫子

衣被つるりと剥けて一遍忌 福田 善吉

霧晴れて沖に日の射す一遍忌 高橋 きよ子

高橋 仁

雨安吾の墨の香残る書院かな

小松原 キイ子

秋澄むや感謝二文字の新墓石

原 雅子

白靴や予想外れの雨となり

岩上 明美

何にでも出来る棒切れ秋高し

鹿野島 孝二

小さき荷も旅の足かせ一遍忌

増井 智子

とかなんとか涼しき僧の絵解きかな

坂本 美千子

門鉞の錆まみれなり一遍忌

常磐 喜美子

秋草のやさしさ強さ一遍忌

野の花はいつも軽やか一遍忌 浜岡 紀子

加藤 いろは

遊行忌の露ひとつぶも言葉なり

当日句の部 入賞作品

○遊行寺賞

また鬼になる子にあきつ止まりけり 篠原 広子

○青木賞

犬猫の卒塔婆も増えて秋彼岸 山下 徹

○北澤賞

秋うらら人より大きな犬の墓 松坂 真理子

○市長賞

真つさらな銭洗ひ籠秋涼し 戸恒 東人

○協会長賞

水青く碧く秋思の只中に 野木 桃花

○協会賞(以下同)

賜高音ごわりとシート乾きけり 鈴木 絹子

田口 茉於

たちまちに賑はふ鯉や秋彼岸

野田 京子

自販機は「つめたい」ばかり秋彼岸

畑 昌子

鯉の口池に秋思の輪をひろげ

伊藤 真理子

掌の賽の目豆腐涼新た

宮澤 進

鯉群れて染まる水面や秋彼岸

小林 和子

秋彼岸名馬の墓に菊の供花

山西 雅子

新しき木橋の艶や秋彼岸

神谷 章夫

秋彼岸百畳敷に膝揃へ

秋彼岸放生池に魚の息

上春 那美

爽やかや竹つ影歩む影すべて

篠崎 路子

要らぬもの身より離れて秋彼岸

加藤 いろは

佳き人とよき話して秋彼岸

和田 郁子

まつさらな一日があり秋彼岸

小松原 キイ子

ゆつたりと鯉の水脈ひく秋彼岸

山本 よしえ

秋彼岸萩の枝葉を整へて

中澤 弘子

秋天や一遍様の旅姿

関 美晴

小き蜘蛛膝に寄りきて秋彼岸

第一三三回市民俳句秋の大会

令和七年十月十三日、藤沢市民会館第一展示
集会ホールにて開催。

応募者一二二名、当日の参加は九十二名。

講演 戸恒東人氏（「春月」主宰）

― 野澤節子の俳句 ―

入賞作品

○特別賞

富山 ゆたか
山の端を離れし月の迅さかな

○特別賞

佐野 健
去ぬ燕ゆつくり醸す醤油蔵

○市長賞

寺田 篤弘
小鳥来る空より音符ふるやうに

○市議会議長賞

古市 シゲ子
近道は坂道ばかり葛の花

○教育委員会賞

小宮山 はるき
虫を聴く床なる母を拭きながら

○俳句協会賞

野原 青
盆支度死者も生者も迎へむと

○協会賞（以下同）

山下 遊児
星月夜みらいは見えぬ望遠鏡

佐野 恋蔵
月明り小石ひとつを好きになる

渡部 有紀子
赤とんぼ肩幅ほどの沈下橋

霧野 萬地郎
江ノ電のゆるりがよろし秋の海

中村 みき子
踊り手の忘我の笠の深さかな

畑 昌子
ドロップの缶振つてみる夜長かな

原田 博之
寄木細工の合はす四隅や秋澄めり

岡本 泉
指でとるジャズのリズムや霧の夜

山田 貴世
草の花何やら心言む日なり

加野 庸子
おとがひにかかる紅ひも風の盆

高野 尚志
暮れてなほ鶏頭に日のぬくみあり

開米 遊子
木道に風の声聴く水の秋

松坂 真理子
コスモスや声を聴きたき手紙来る

清水 茂代
無花果やドアノブのごと回し採る

黒田 美佐子
鬼灯を鳴らせば昭和甦り

相澤 陽子
夫の鼻やや高く見ゆサングラス

戸恒東人

吉田和夫

原 みづき

関 美晴

鈴木 智子

有井 悠木

廣田 洋一

小堀 公美子

小林 和子

街路樹は切株ばかりそぞろ寒